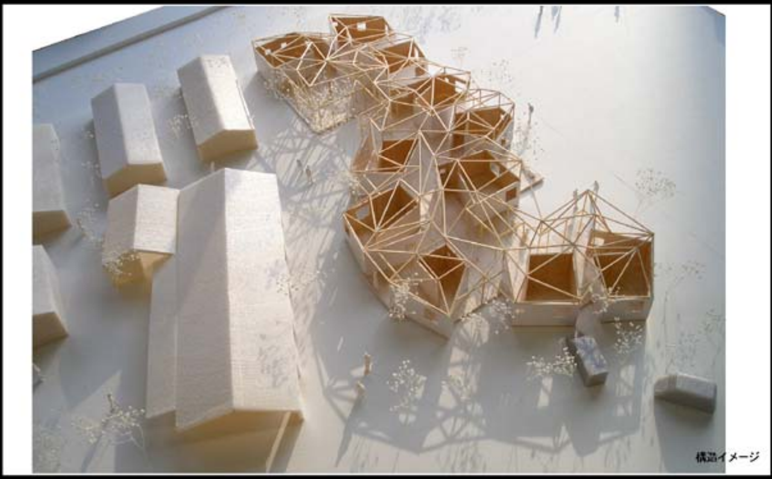
建築の夢／建築における社会性と人間性についての考察と展望　Dream of Architecture / Study and Prospects of Architecture's Sociality and Humanity

＜設計：離れながらつながるカタチ／地域核となるグループホームの提案＞

全体鳥瞰

占有と共有の狭間　空間の深度



構造イメージ

離れつつ繋がる

赤線内-敷地（現状）

赤線内-敷地（現状）

■はじめに

資産相続・維持に関わる土地活用の問題は全国的に広まり、今後の都市や人間社会生活を考えるうえで重要な課題としてある。

景観法という任意法が制定されたことも、無秩序に利益至上主義が加速し続ける状況のなか、あらためて民主主義・人間性・社会性を考え、人間・建築・社会・都市を再考するきっかけとして期待されているが、なかなか効力をもたず試行錯誤のなかにある。

きっかけは、長年養鶏を営んできた祖父の引退によって、それまで使っていた、ひとまとまりの土地が未利用地になったことに始まる。利用・生産性のない土地でもその存在意義にかかわらず、税金という制度によって地権者は搾取され続ける。手放してしまえば楽なものだが、その先どうなるかは目に見えている。そこで、どうにかしてこれまで培われてきたものを、未来に活かしていきたい。という希望によって、提案依頼をうけた。

施主の要望をひとことで言えば、小規模・多機能なグループホームをつくりたいということである。

■プログラム

人口減少と高齢化・少子化社会の進むと予想される日本において、新たなグループホームのありかたを考えることは急務である。大規模な特別養護老人ホームや、医療設備の整った病院などの計画・建設は進められているが、はたしてそれだけが行き着く答えであろうか。そうではない、ここで注目されてきている方法に家庭的環境を目指す「小規模・多機能ホーム」がある。

なぜ、そのような考えが生まれてきたのか。そこには「人間性」という問題が含まれているからだ。郊外に建設された、いかにも豪華で至れり尽くせりの大規模老人ホームは、一見親切なもののようであるが、視点を少し変えれば高齢者とひと所に集めて郊外の隔離施設に収容し、それまで育て生きてきた地域コミュニティから追放する「現代版の姥捨て山」のようでもある。

都市型モデルの時代、施設から住宅へ、小規模でも地域との関わりと助け合いが必要である。多世代の集団生活の場であり、終の棲み家であり、教育の場でもある。そこは人間として人間をみる場、知識の切り売り的教育（学校）ではなく知識の受け渡しと人間を育てる教育の場、助け合う心を育む場である。

「人間らしく生活するために」ということがひとつの大きなテーマである。

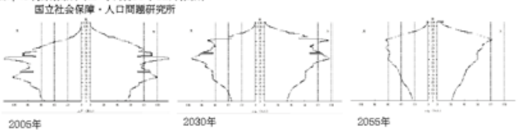
人口推移と社会

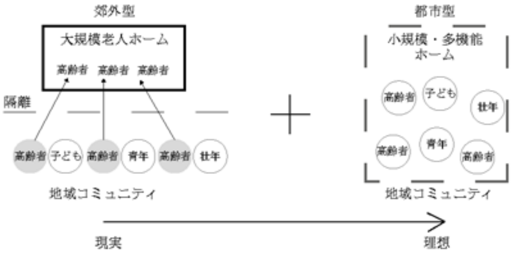
2005年現在、日本の総人口は1億2777万人であるが、50年後の2055年には9000万人を切るという推計結果がでた。

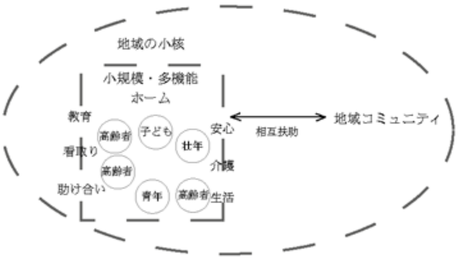
さらに、65歳以上の高齢者人口は総人口の4割を超えるという。下図の人口ピラミッドを見てもわかるように、社会の構成が今後50年の間に大きく変わると想像される。

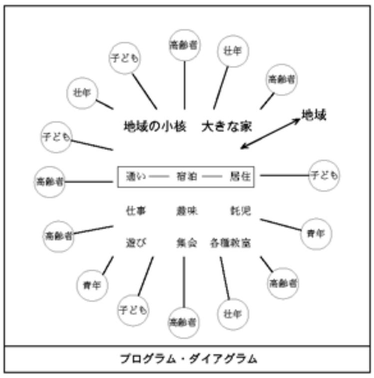
高齢者を中心とした街づくり、または高齢者も若者も分け隔てなく、いち人間としてどのように往き、生活するかということをもう一度考え直す時が今である。あるいは、この人口・社会予想を覆すほどの構想と実践は可能だろうか。

日本の将来推計人口（平成18年12月推計）
国立社会保障・人口問題研究所









プログラム・ダイアグラム

■提案敷地周辺

新しい街の出現

現在では、跡継ぎのいなくなった開拓時代人の高齢化が進み、それぞれの土地を維持できず、切り売りを余儀なくされている。

そこに目をつけたディベロッパーやハウスメーカーが、屋敷跡や田畑を平らに造成し、盛んにミニ開発をおこなっている。小住宅が密集して建つこの手のニュータウンは、いまや全国的にみられる傾向であり、その力とスピードは止めようもない。

だがこの状況を悲観的みたり、憤激をもって対抗するだけではなく少しでも肯定的に観察すれば、過疎・高齢化していく街に、新たな住み手が定着することで、多世代が集う新しい街が形成されている状況であるともみれる。

田畑と、そこに生まれる新興住宅地

■提案敷地

兵庫県明石市大久保町森田

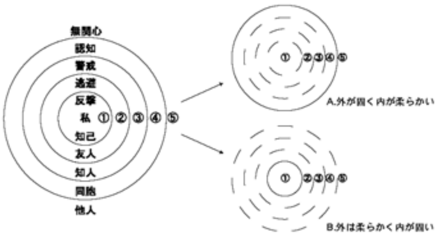
用途地域：第１種中高層住居専用地域
敷地面積：3750㎡
建ぺい率：　60%
容積率　：　200%
高度地区：第３種高度地区
防火・準防火地域：建築基準法22条区域
予算　　：100,000,000円（外構、設備除く）

■コンセプト（人間と社会・個と集団・部分と全体）

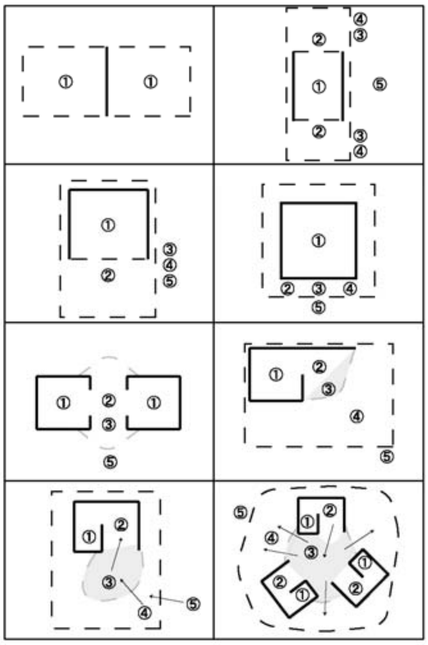
高齢者を中心としたグループホームというプログラムではあるが、個が集まってある集団となり、共同生活を営む場である。という人間社会の基本構成であることに変わりはない。ではその原型は何か、を考え構築することが主題になる。

個がいかに独立を保ちながら、全体として繋がり、全体は全体でいかにして個に還元できるかを、人間とカタチ（空間）の両側から見つけ出すことを目的とする。

人間の領域に関する５段階の区分



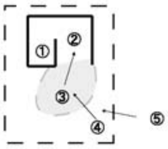
領域構成と共有される領域の例



■個（部分）の決定と集団（全体）への派生

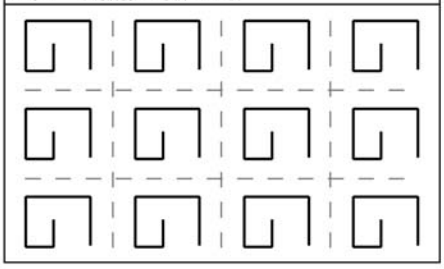
個としての領域を保ちつつも、カタチのもつ「空間の深度」によって、段階的に他の個と結びつき、共有領域をつくりだす「の」の字型の平面を基本単位として全体を構成する。

個人の占有領域としての部分と、全体を形づくる部分という２つの意味をもつ。

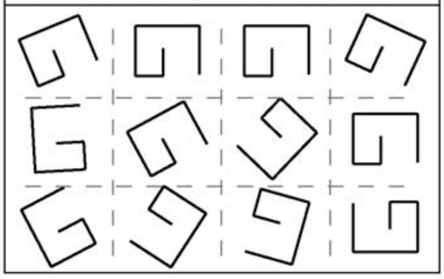


基本単位
ゆるやかに変わる「空間の深度」

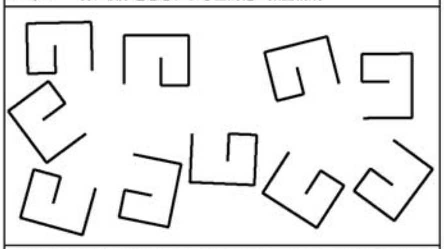
Step 1　単純複製による独立した個



Step 2　ランダムなずらしと個体間距離による領域のゆらぎ

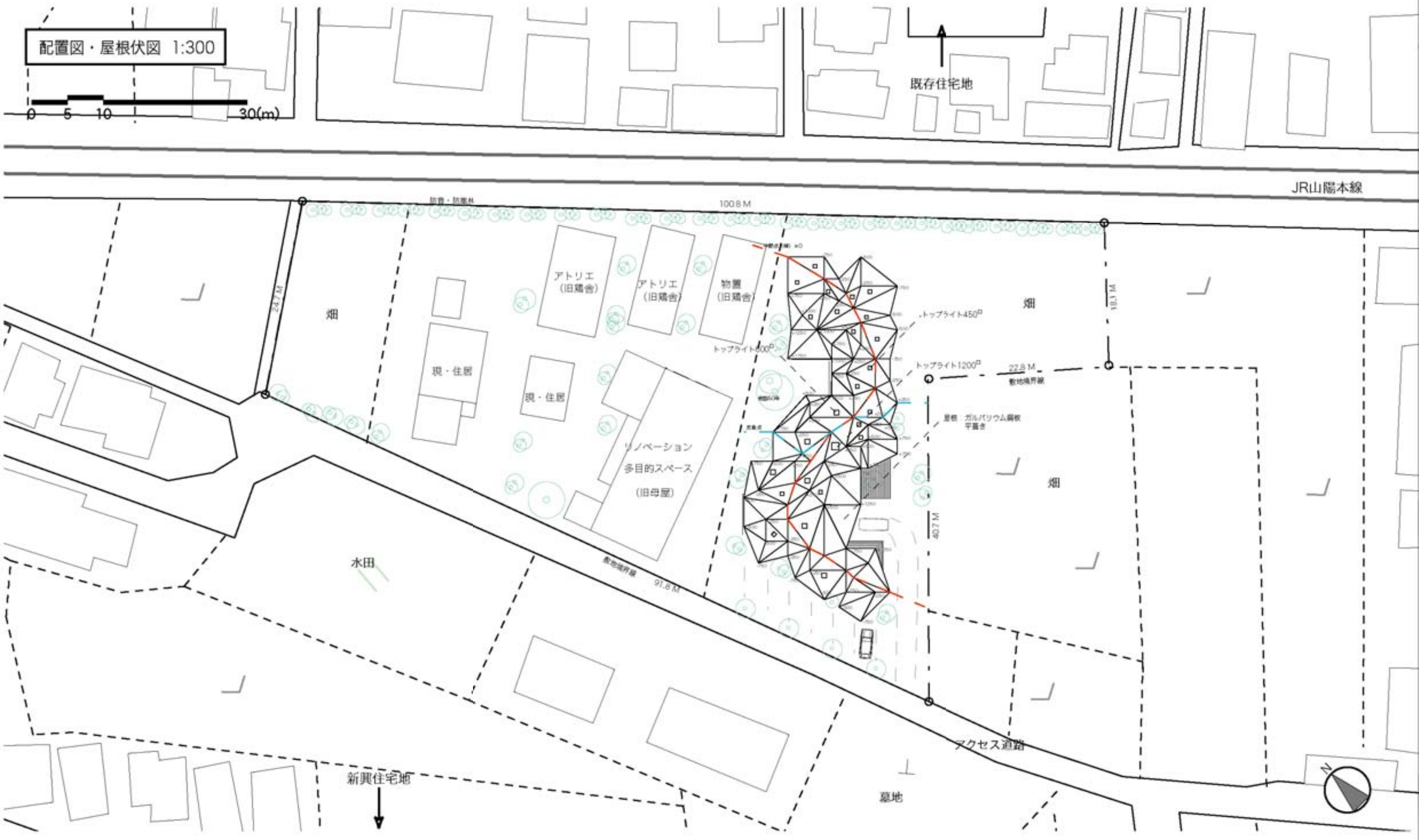


Step 3　弱い秩序と意志による空間化・集団構成



これらの「原型」をもとに、敷地の特性とプログラムの機能性をカタチ・大きさ・配置決定要因としていくことで、設計可能なものへと定着させていく。

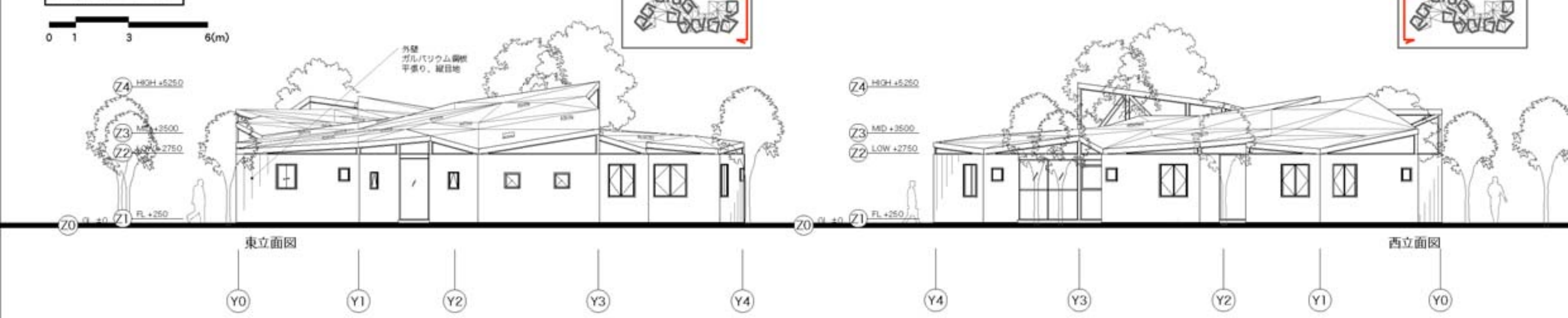
配置図・屋根伏図　1:300



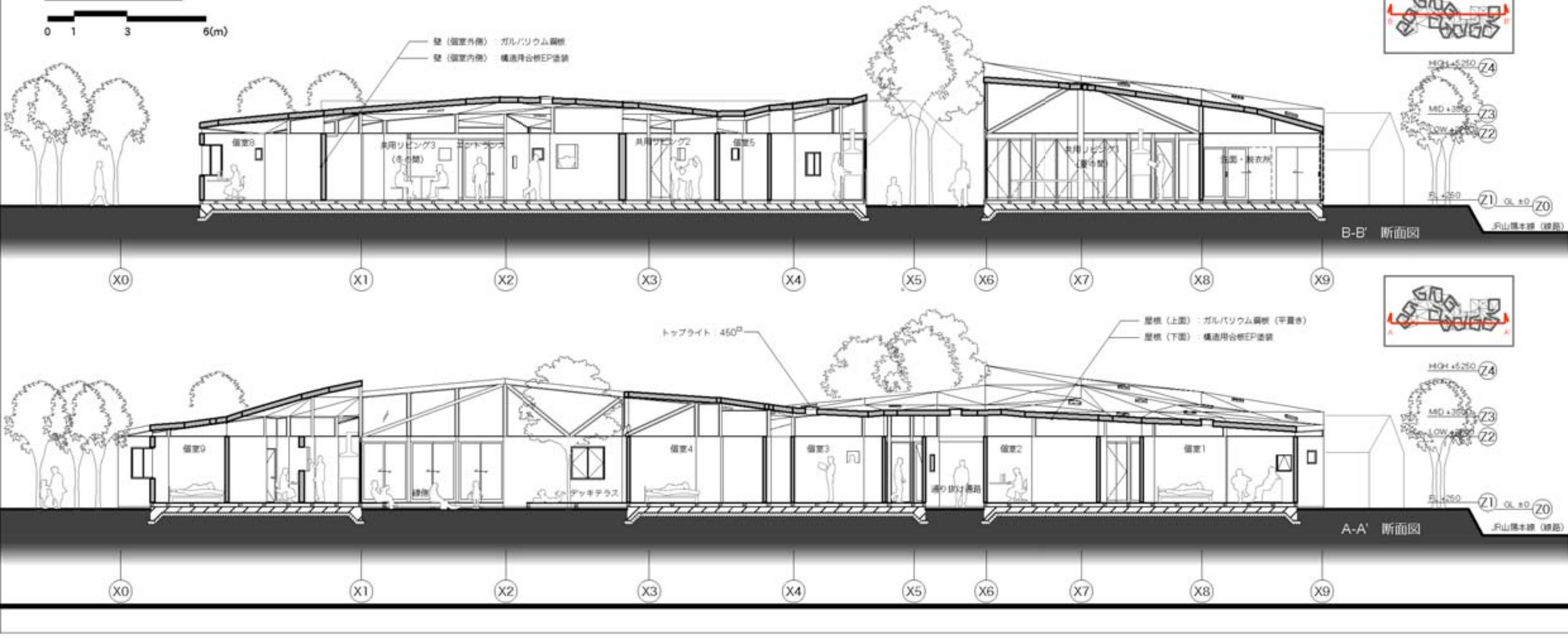
プラン・イメージ

平面図 1:100

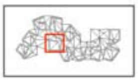
立面図 1:100

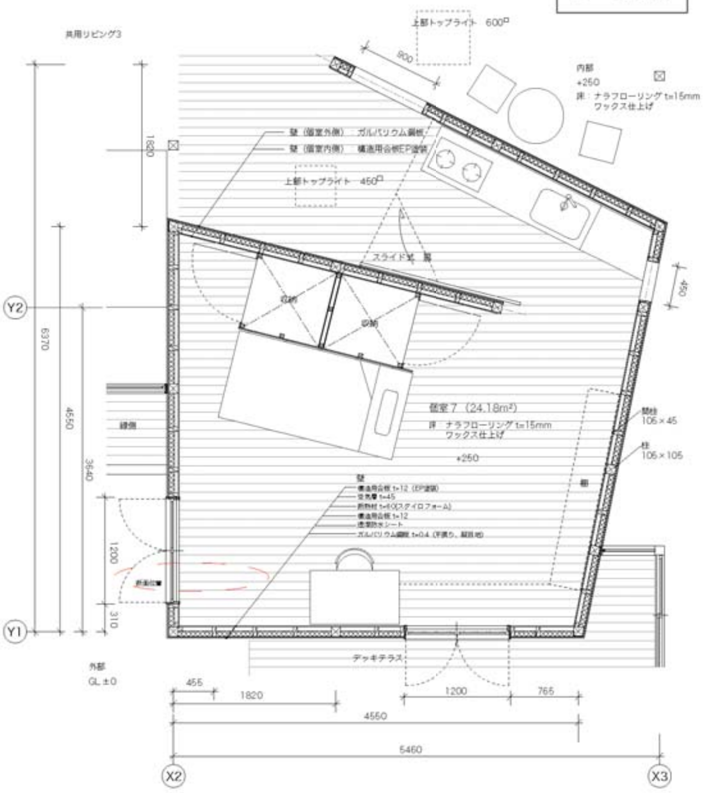


断面図 1:100

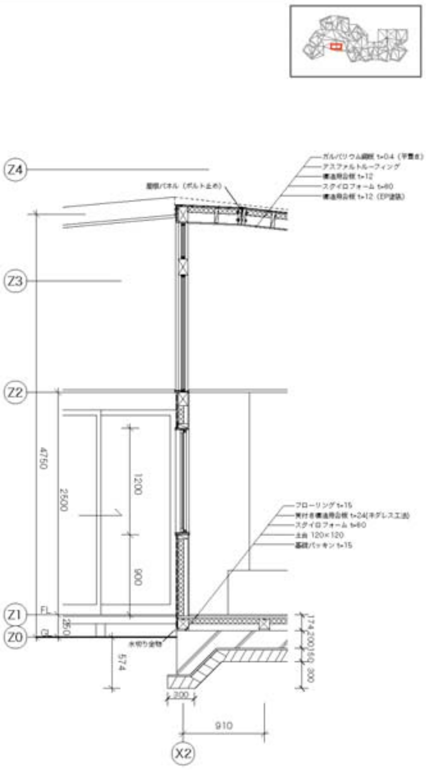


部分詳細図



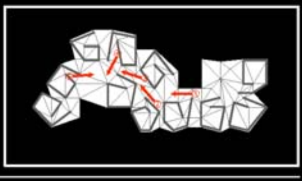


個室7　平面図　1:30



個室7　部分断面図　1:30

①　②　③　④　⑤

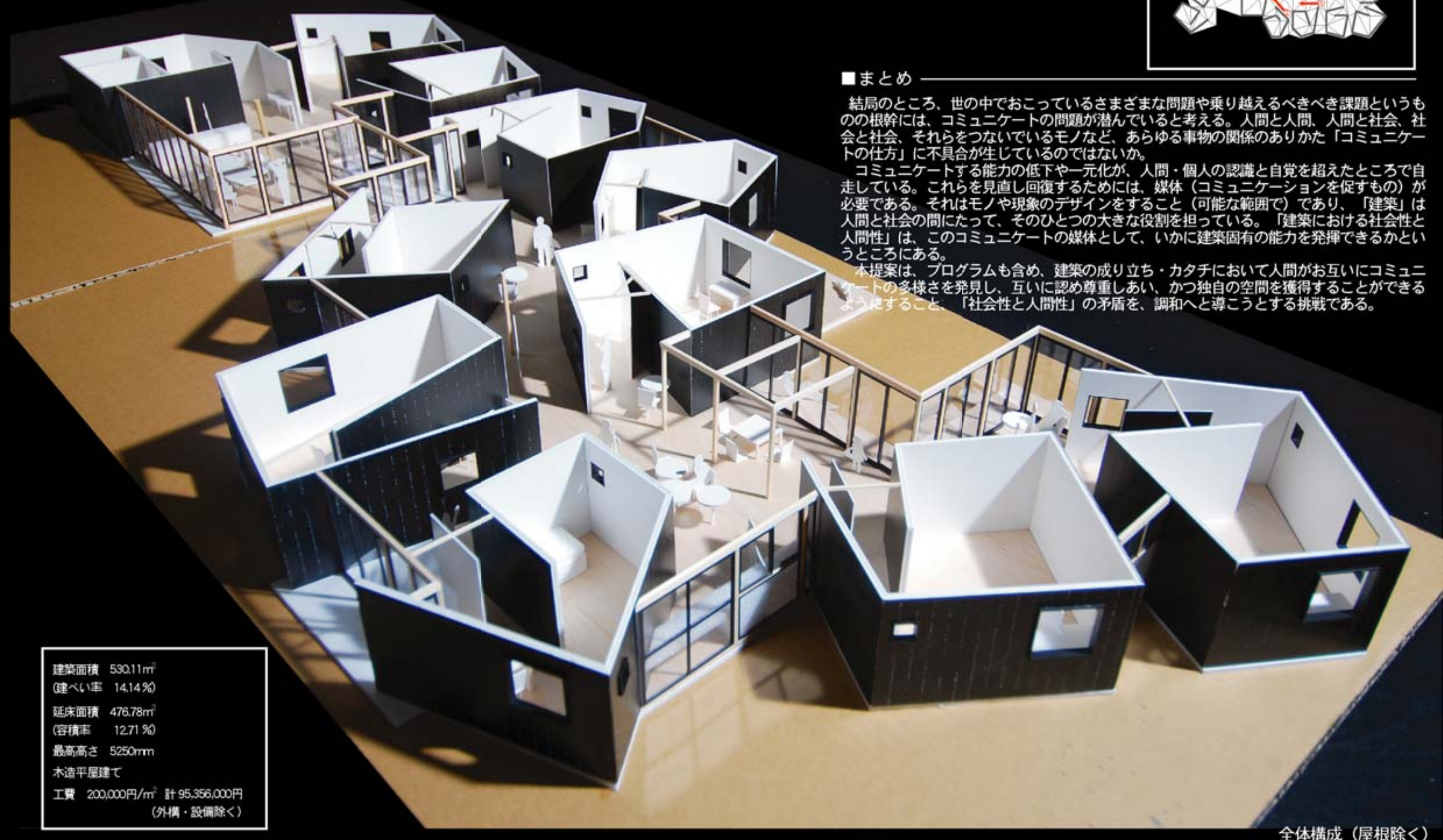


■まとめ

　結局のところ、世の中でおこっているさまざまな問題や乗り越えるべきべき課題というものの根幹には、コミュニケートの問題が潜んでいると考える。人間と人間、人間と社会、社会と社会、それらをつないでいるモノなど、あらゆる事物の関係のありかた「コミュニケートの仕方」に不具合が生じているのではないか。

　コミュニケートする能力の低下や一元化が、人間・個人の認識と自覚を超えたところで自走している。これらを見直し回復するためには、媒体（コミュニケーションを促すもの）が必要である。それはモノや現象のデザインをすること（可能な範囲で）であり、「建築」は人間と社会の間にたって、そのひとつの大きな役割を担っている。「建築における社会性と人間性」は、このコミュニケートの媒体として、いかに建築固有の能力を発揮できるかというところにある。

　本提案は、プログラムも含め、建築の成り立ち・カタチにおいて人間がお互いにコミュニケートの多様さを発見し、互いに認め尊重しあい、かつ独自の空間を獲得することができるようにすること、「社会性と人間性」の矛盾を、調和へと導こうとする挑戦である。



建築面積　530.11m²
（建ぺい率　14.14％）
延床面積　476.78m²
（容積率　12.71％）
最高高さ　5250mm
木造平屋建て
工費　200,000円/m²　計 95,356,000円
（外構・設備除く）

全体構成（屋根除く）